福井エリア生活エンタテインメントマガジン 月刊ウララ1995年6月25日発行（毎月1回25日発行）第8巻第7号通巻82号

URALA

JULY.1995
No.82
7
月刊ウララ
定価450yen

この夏行ってみたい 人情民宿10選

'95夏おすすめ 飲食店ガイド

総勢250名様に当たる お食事券プレゼント付！

読めば違いが見える
通信カラオケ攻略法

映画『きけ、わだつみの声』
緒形直人・風間トオル インタビュー

福井県在住OL100人にインタビュー
こんな男は許せない！

月刊URALA特別試写会
話題の超ホラームービー
『学校の怪談』
ペアで200組
400名様ご招待！

企業の肖像

時間を見つけては筆を持つ。自由で、のびやかな線は、もはや興味の領域を超えている。

第4回　清川メッキ工業株式会社

代表取締役社長

清川　忠

好きこそ、物の上手なれ。

訪ねてきた人には、必ず会う。仕事は人に始まり、人に終わる。

裸一貫で会社を興し、ビッグ企業に育て上げる。誰もが夢見るサクセス・ストーリーのコツは、強運や地道な努力はもちろんのこと、何よりもその分野を「好きである」ことだった。清川　忠、55歳。メッキに取り憑かれ、メッキを究め続けてきた彼の視線は、今、世界へ、宇宙へと広がりつつある――。

倉庫の中は、さながらスクラップ場のように騒然としていた。工作機械や各種部品、サンプルが至るところに散らばっており、その散乱ぶりは、歩くのも困難なほど。足の踏み場もない床に手頃なスペースを見つけて、ようやく撮影がはじまった。

「自分の会社の倉庫とはいえ、すごい場所やなあ。こんなところ背景に写真撮ったら、読者の人、『この人なんやろ？』と思わないかな？」

そう言って笑うのは、清川メッキ工業株式会社 代表取締役社長、清川忠氏。その表情からは、思いがけない場所での撮影に多少戸惑いながらも、この状況を楽しんでいる余裕が伺えた。

その日、撮影したのは、右ページにある『企業の肖像』おなじみのイメージカット。別に撮影場所が他になかったわけではない。平成3年に建てられた新社屋は、開放的でセンスあふれる空間だし、最新機器が立ち並ぶ工場内も、抜群の背景になる。

しかし、取材を進める内に、（社長自身を象徴する空間は、倉庫しかない）という強い思いが取材陣の中に芽生えていた。が、なにぶんにも『倉庫』である。外部にはあまり見せたくない場所だろうし、ましてや写真の背景にはしたくない場所だろう。社長は承諾してくれるだろうか……と、不安を抱きながら、おそるおそる聞くと、

「面白いな、それ。いいよ」

と、一言。嫌がるどころか、好奇心一杯の瞳を輝かせながら、嬉しそうな返事が返ってきたのである。

聞けば、子供の頃から、何でも自分の手でつくらないと気が済まない性格だったという。せっかく親が買ってくれたオモチャもすぐに分解し、とりあえず中の構造を確認する。つくっては分解し、分解してはまたつくり直すことが楽しくて仕方がなかった。

学校での得意科目はやはり数学、理科、化学。しかし、それを仕事に結びつけようとまでは思いもしなかった彼は、高校卒業後、一度は染色会社に入社する。しかし、作業中の事故から入院することになった時、ふと将来のことを考えた。

「高卒の自分が、このまま今の会社で頑張っても、せいぜい係長が関の山ではないだろうか……」

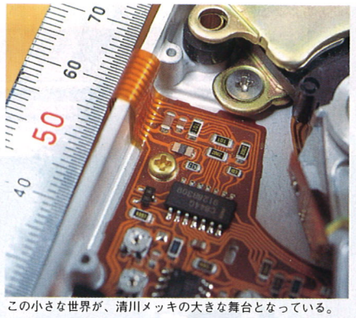
無意識に枕元にある電話帳を手に取っていた。順番に各事業所の名前を見ていた目が、ふとメッキ産業のところで止まる。小学校の時のメッキの実験の様子が鮮やかに頭に浮かんできた。

「やっぱり、好きな分野で仕事をしてみたかった。それに当時は、メッキ関係の事業所が少なく、これならやれるかもしれないと思ったのです」

退院後、早速、福井市内のメッキ工場に再就職。福井で3年、大阪で1年間働いた後、昭和38年、福井市和田中に清川メッキを創業した。

「創業といっても、当時はお金がないからね。社屋は中古の整備工場を7万円で買い取ったものだし、機械ももちろん中古でした」

家族や親戚が猛反対する中でのス



この小さな世界が、清川メッキの大きな舞台となっている。

ハードとソフトがぎっしりと詰まった工場内部。
社長と社員のアイデアが至るところで活かされている。

企業DATA

創　　業	昭和38年4月
資 本 金	2,000万円
代 表 者	清川　忠
従業員数	175名 （グループ総数）
主な事業	硬質クローム、硬質アルマイト、貴金属メッキ、パーカー、アエンメッキ、ニッケルクロムメッキ、電着塗装など．

こんなところにも、企業理念が!!　似顔絵つきが、いかにも社長らしい。

タートだった。その上、「三八豪雪」による不況の追い打ちがあり、何よりも、23歳という年齢は、クライアントの信用を得るにはあまりに若かった。

「だから、努力はしましたよ。他人が2日に一度訪問するところへは毎日、他人が毎日訪問するところへは、朝・昼・晩と出向きました」

もともと人と会うのが好きな性格を営業としてフルに活用した。「興味を持った人には必ず会い、訪ねてきた人はどんな人でも会う」という姿勢は、創業当時からのモットーだ。仕事は、人に始まり、人に終わる。クライアントの信用を得るために、やりかけの仕事を全部床に並べて、仕事がたくさんあるように見せる工夫もした。

アイデアのアンテナもまた、全身に張りめぐらされていた。創業当初手掛けていた仕事は、染色、工作機械、自動車のバンパーやハンドルなどの表面処理技術。しかし、生来が発明・工夫好きの性格のこと。メッキという可能性に満ちた素材を目の前にして、彼の好奇心がおとなしくしているわけもなく、仕事に打ち込む傍ら、研究・開発に明け暮れていった。

「いたずら心」を忘れずに、試行錯誤を繰り返す。

その「好奇心」がカタチとなったのが、昭和53年。メッキ表面処理の技術を応用して世に送り出したのが、自転車やオートバイ用リムとして大ヒットした『アルミ合金製リム』だった。

「話が難しくてわからない！」とお怒りの読者のために、ここで簡単にメッキについてご説明しよう。

メッキには、大きく分けて貴金属に代表される装飾メッキと、メッキそのものに機能が秘められた機能メッキの2種類に分けられる。

一般になじみが深いのは、前者の装飾メッキ。もちろん、現在の装飾メッキの技術は非常に優れているが、ひと昔前の装飾メッキには、二流的なイメージがつきまとっていた。それを裏付けるかのような言葉が、「メッキが剝げる」（外面の飾りが取れて、悪い中身が暴露する。本性が現れる【広辞苑】）という言葉。これはまさに、それまでのメッキ技術のイメージを象徴する表現だと言えるだろう。

当時、清川社長が追求したのは、後者の機能メッキ。彼が開発した「アルミ合金リム」は、アルミ合金の電解研磨における様々な問題点を解決し、美しいだけでなく、腐食にも強い表面処理を実現したものだった。

また、リムの表面処理を効果的に行なう自動処理機も同時に開発。大手自動車メーカーからオートバイ用リムの加工を一手に引き受けるようになり、やがて、世界中を走るオートバイのアルミ合金製リムの大半は、清川メッキ製となったのである。

創業15年目にして、一気に飛躍した清川メッキ。その原動力となったのが、彼自身の創造精神であった。

「僕がやっているのは、発明・工夫といった大袈裟なものではありません。ただいろいろ『いたずら』するのが好きで、試行錯誤を繰り返しているうちに、予想以上に効果的な方法が見つかっただけですよ」。

アイデアは、鮮度が命。思い立ったら吉日で、まずは実行に移す。

類は友を呼ぶ。社長が発明・工夫好きとくれば、社員にもまた、一癖も二癖もある顔ぶれが自然に集まってきた。会社も社員も若いだけに、行動もフレキシブルだった。

「その当時は毎月、近くのレストランに集まっては知恵を出し合ったりしていたのですよ。今も昔も、新しいアイデアの開発にはみんな積極的です」

顔をつきあわせての打合せよりも、雑談で。堅苦しい会議室よりも、レストランで。発想は自由な環境から生まれるというのが、彼の持論なのだ。

アイデアは鮮度が命。思い立ったら吉日で、まず実行に移します。

——清川　忠

PROFILE

1940年9月、福井市和田中生まれ。23歳で清川メッキ工業株式会社を創業。現在は、グループ企業2社、社員175名のトップに立っている。その気さくな性格とやさしい物腰は、社員の間でも評判。料理、絵画、焼き物と趣味も多彩で、歴史にも造詣が深い、マルチ人間だ。

だ。

「ただ、そこでせっかく良いアイデアが出ても、それをずっと寝かしていては意味がありません。アイデアは、鮮度が命。思い立ったら吉日で、まず、実行に移します」。

だから、彼自身はもちろん、会社全体のフットワークも非常に軽い。新規分野への参入もスムーズに行なわれるというわけである。

そんなフットワークの良さを証明する、恰好の例がある。オートバイリムが好調な滑り出しを見せていた昭和53年頃、彼はビジネス雑誌でとある記事を読んだ。——電子部品関連は、今後10年で10倍に伸びる産業になる——。途端に彼の好奇心はムズムズと動きだした。『思い立ったら吉日』の彼のこと、早速、様々な家電メーカーを訪れ、数ケ月後には、とある家電メーカーの電子部品プロジェクトチームの話があり、その参入に成功したのである。

失敗を失敗に終わらさない。過去の失敗には、未来の成功がある。

プロジェクトチーム内での清川メッキの役割は、電子部品のメッキ加工、機器の制御または半田性をスムーズにするため、1㎝にも満たない小さな部品一つひとつに、メッキ加工を施していくのである。

参入当初は、生産量も少なかったため、メッキ加工も手作業であった。が、生産量の拡大にともない、生産機械そのものの開発にも着手したのである。

10年で10倍は、嘘ではなかった。電子部品はやがて、あらゆる電化製品の核となり、清川メッキもそれにともなって急成長を遂げたのである。10年前、もし、彼がビジネス誌の記事をそのまま流し読みしていたら、そして、もし、会社のフットワークが重かったら、今の成功は決して現実のものにはならなかったであろう。

そしてもう一つ、忘れてはならないのが、倉庫に眠る試作機械たちだ。

「電子部品は、百万個に一つの不良品も許されない世界。もちろん機械にも精密さが要求されます。高効率、高性能の機械を一台つくるために、いくつもの試作機械をつくったのです」

これまでにつくった試作機械やそれに伴うサンプル部品は数知れず。日の目を見ないままに倉庫に眠ってしまった機械も数多くある。

イメージカットの撮影の合間、彼は床にころがっている機械類を懐かしそうに眺めていた。私たちの目にはガラクタとしてしか映らない物も彼にとっては大切な作品。そこには、試行錯誤とアイデアと苦い失敗がぎっしりと詰まっている。そして、失敗を失敗に終わらさない、彼のチャレンジ精神も。そう、この倉庫こそ彼自身の歴史が詰まった宝の箱だったのである。

世界から、宇宙へ。原動力は「好きこそ物の上手なれ」。

家電、AV機器、OA機器などなど。新製品が出ると、すぐに分解してしまう癖は、55歳になった今なお健在だ。創造精神も衰えるどころか、ますます活発になり、それは仕事の枠を超えて、料理、絵画、陶芸へと多彩な分野へ広がっている。料理は、家族も太鼓判を押す腕前。絵画に至っては、もはや素人とは言えない領域に達している。

「でも、料理も絵画もあくまで趣味ですよ。65歳になったら、本気で遊ぼうと思っていますが、まだ、10年ある。それまでは、仕事でいろんな分野にチャレンジしようと思っているのですよ」

今、彼の目線は、世界へ、そして、遙か宇宙に向けられている。昨年の暮れには、メッキ業界では日本初となるISO規格（国際的な単位・用語などの標準化を推進する機構。JIS規格の国際版）における9001を取得。海外進出への足掛かりとした。

また、全く新しい機能をもったメッキ技術も着々と開発が進んでいる。なんと、あのスペースシャトルに清川メッキの技術で製品が使用されているのだ。

創造力と経営力の両立は、難しいというのが一般的見解だ。創造力が豊かな人は経営に疎いとされ、経営力に優れた人は、創造力に乏しいという。しかし、彼は、そんな通念などどこ吹く風。瓢々としたスタンスで、創造と経営という荒馬を見事に乗りこなしている。その秘訣は、と聞くと、ただ一言。

「やっぱり、メッキが好きなのですよ」

好きこそ物の上手なれ、という諺は、やはり正しいのである。